

# 学校ボランティア通信 No.8

～小学校特集～

発行日：2008年7月16日

神奈川大学  
教職課程指導室



「頼りになる先生」になるために

第二法学部法律学科2008年卒業

中村 栄一起

～内容～

- ・「頼りになる先生になるために」 中村 栄一起
- ・ボランティアを通して見てきたもの 伊良部 温野
- ・子どもたちに助けられて 石田 敏之
- ・学校ボランティアを振り返って 田村 拓之
- ・子どもたちとかかわること 小野塚 俊輔

「先生は頼りないよ…」これは私が学校ボランティアに行くようになって数ヶ月が経ったある日、とある児童の何気無い(私にとっては重要な問題である)つぶやきである。私はこの一言に深く考えさせられた。頼りになる先生はどういう先生なのか…。そして、私は、現場に立つたらどういう先生になりたいのかと。

私が学校ボランティアで横浜市立浅間台小学校へ行くようになって一年半になろうとしている。私は将来、小学校の教員になりたいと思って、これまでも地元で子ども会活動の手伝いをしてきたり、小学校の体験学習に参加させて頂いてきたが、日常の学校現場に携わることができる学校ボランティア(アシスタントティーチャーの活動)はこれまでの体験以上に得るものが大きかったように思う。

私は活動の中で、主に低学年を担当することが多いのだが、授業中や給

食の配膳時等に落ち着いて座っていられず、ふらふらと動いている児童に出くわすこともある。また、児童同士のケンカに出くわすこともしばしばある。そのような場面で私は、注意をしたり、児童に何故注意されているのかわかってもらおうと話をしたりするのだが、聞いてくれないことが多かった。ところが、担任の先生や他の先生が注意をすると児童はしっかり受け止め、行動をやめるのである。当初、私は何故だろうと疑問に思うことばかりであった。そんなある日、冒頭の言葉を児童に言われてしまったのである。

これは、正しい指摘であると今になって思う。私はそれをきっかけに私と先生方の違いを探してみるようになった。すると、私の注意には先生方と違って一貫性がなかったことに気づいた。例えば、授業中にふらふらしている児童に対して、きつく叱ったり、一言言うだけだったり場面によってバラバラだったのである。ところが、先生方は場面に応じて多少の差はあったとしてもこの行動にはこう対応するというものがあるのだと感じ取ることができた。また、注意する時も、ただ「いけない」というだけでなく児童が納得するように説明をするのである。また、児童のケンカの仲裁に入った場合にも、両者の意見をしっかりと聞いた上で両方が納得できるように教え諭していた。

これらのことは児童を指導していく上で当たり前のことであるが、私はその当たり前のことも出来ていなかったのである。「先生は頼りないよ…」と言った児童は、私に「それで先生になって大丈夫？」と教えてくれたのかもしれない。私と先生方の対応の違いに気づき、私の対応に変化が表れると児童達の態度にも変化がみられてきた。少しずつだが、私の言っている事を理解してくれるようになってきており、以前よりも混乱する場面が減ってきたように思う。

学校ボランティアは本当に楽しい。子ども達(ここからはあえて児童と呼ばず子どもと呼ぶ)と一日学校で一緒に学習したり、遊んだり、給食を一緒に食べたり、時には一緒に叱られたりするなかで子ども達との距離もだいたい縮まってきているように思う。そして私に対する信頼感・安心感を持ってくれる子ども達も多くなってきた。それは、私の顔を見ると笑顔を見せてくれる子ども達(別に私の顔がもしろいわけではない)や話しかけてくれる子ども達が多くなってきた。当初「おじさん」と呼ばれていたが、今ではしっかり「先生」と呼ばれるようになってきた。些細なことかもしれないが、これは大きな変化であり、私自身の成長の表れかもしれないと考える。

学校ボランティアを通じて、将来現場へ出たときのために必要な事を多く学ばせて頂きました。そして、これからも「頼りになる先生」になるため、子ども達の笑顔のために、現場での体験を通して勉強させて頂きたいと思う。

## ボランティアを通してみえてきたもの

法学部 自治行政学科 2008年卒業 伊良部 温野

私が寺尾小にボランティアに行くようになってから1年半が経ちました。この1年半の間で私は寺尾小の子どもたちから多くのことを学び、成長させてもらいました。

沖縄県の宮古島出身の私にとっては、宿泊体験で山登りをしたことも授業の中で川の学習をしたことも、見るもの触れるもの全てが初めてのものばかりで、子どもたちに負けないくらい毎日が感動と興奮の日々です。（宮古島には山も川もありません!!）そして何より嬉しいのが、子どもたちと「共感」できることです。授業の中で自分が発見したこと、感じたことなど、子どもたちは自分の気持ちを素直に表現します。そのような気持ちを子どもたちとふれ合うなかで「共感」できる喜び、そして大切さを教えてもらいました。

また、ボランティアを始めた頃は戸惑うことも多くて、上手く子どもたちを注意できなかったり、なかなかコミュニケーションがとれない子どもたちもいました。しかし子どもたちと過ごすなかで、子どもたちが変わるのを待つのではなく、こちらから視点を変えて子どもたちを見ることの大切さに気付かされました。そのきっかけは普段教室では大人しく

あまり話すことのなかった子どもが、休日に行われたサッカーの試合ではとても生き生きして積極的な一面を見せてくれたことでした。色んな角度から子どもたちを見ると、今まで気付かなかった子どもたちの素晴らしい部分が見えてきて、それによって子どもたち一人ひとりに合ったかかわり合いができるようになりました。

『子どもを知る』 -とても難しいことですが、とても大切なことでもあるということを通して学べたこと、実際に子どもたちとかがわっているからこそ学べたことだと思います。

実際の教育現場は想像以上に忙しく、大変なことも沢山あります。しかし教師になる前に教育現場に携われることは、とても貴重な時間であり大きな意味をもつものとなっています。そして何より、子どもたちは日々のかかわり合いのなかで私に新しい発見をくれます。このことが教師を目指す私にとっては宝物となっています。今日も寺尾小の子どもたちの笑顔に支えられながら夢に向かって努力していきます。

## 子どもたちに助けられて

人間科学部 人間科学科 3年 石田 敏之

私は現在、学校ボランティアとして大口台小学校に行かせていただいています。初めてボランティアに行かせていただいたのが4月でそれからもう3ヶ月が過ぎたわけですが、最近になってやっと児童たちと打ち解けてきたという実感を持っています。

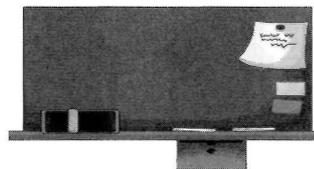
大口台小学校の子どもたちはとても元気があって、みんな人懐っこくてとてもかわいいです。また大口台小学校の先生方は校長先生、副校長先生はじめ、みなさんとても親切です。困ったことがあれば親身になって相談に乗ってくれます。

そもそも、私が学校ボランティアを始めたきっかけは先生の薦めがあったからです。自分からやろうと決心して始めたわけではなかったのですが、最初はボランティアに行くことにあまり気乗りしませんでした。たった週1回でも朝が早くてきついし、慣れない環境でストレスを感じていました。しかし、いつの間にか週1回のボランティアがとても楽しくなっていました。学校ボランティアに行けば行くほど子どもたちと仲良くなっていったからです。最初は子どもたちにどう接してあげればいいのかわからなかったのですが、子どもたちが私に近づいてきてどんどん話しかけてきてくれました。これは大口台小の子どもたちのいいところでどんどん話しかけてきてくれます。私は本当に子どもたちに助けられたと思います。たまに「あんた

そんなんで先生になれるの!？」といったきつい言葉を子どもから言われることがあります。正直、傷つかないといえば嘘になりますが、子どもたちは思ったことをそのまま口にするので、私の未熟さがよくわかり、次はこうしよう、あの場面ではこう動こうといった改善すべき点がわかります。

また、学校ボランティアを通じて、大学の授業では得られない、学校という現場の現実、先生の仕事、日常の姿を目にすることができる貴重な時間だと思います。そして、何よりも子どもたちと接することのできる機会が持てるということがいちばん重要だと思います。

自分が教員になったとき、この学校ボランティアをしていたことが必ず生きてくると思います。むしろ、生かせるように努力したいと思います。ただボランティアに行くのではなく、目的意識を持ってこれからも継続的に続けていきたいと思っています。



## 学校ボランティアを振り返って

経済学部 経済学科 卒業生 田村 拓之

私は、今年度の4月から、横浜市立下末吉小学校でAT（アシスタント・ティーチャー）として、週に一度、実際の教育現場を体験する機会に恵まれています。ATの機会を提供して下さった教職課程の諸先生方には、素晴らしい機会を提供して下さった事を、この場を借りてお礼申し上げます。

私は現在神奈川大学を卒業し、通信制の大学に通い、小学校教員免許の取得に励んでいます。現在中学校・高等学校の免許を持ちながらも、小学校という発達段階に興味を持ち、新たに免許の取得をめざしています。昨年の教育実習は、中学校での実習だったので、小学校教育を体験するのは初の経験です。実際にどのような事をさせていたでいるのか、体験談を中心に述べていきます。

私の一日は朝の昇降口での児童のお出迎えから始まります。「先生おはようございます」と、正門から駆け寄る児童の笑顔に、いつも元気と気合をもらいます。（当然のことながら、小学校の朝ははやく、毎度起きるのが困難です。）そして児童を迎えた後は、朝の職員打ち合わせに参加させていただきます。そして、たまたま担当している曜日に朝会が多いので、参加できています。朝会では、仲良し会といった、全校児童が登校班によるゲームをする週、道徳文章の読み聞かせ、音楽集会での学年発表などが行われます。そして、一校時が始まる！という流れになっています。

実際の授業では、主に低学年のクラスに入ります。下末吉小学校の児童は、活気に溢れ、元気いっぱいの児童です。その児童を相手に実際に教室に入り、先生方の補助をします。子どもたちの学力や言語力の発達には差が出るので、担任の先生の授業進

行の邪魔や、行き過ぎた補助にならないよう、限度やタイミングを見極めながらの補助を心掛けています。国語の時間においては一緒に音読したり、算数の理解に苦しむ児童には、担任の先生が教えた方法に則しながら教えたりします。私が一番苦労したことは、日本語が苦手な外国育ちの児童と、いかにコミュニケーションをとるかです。日常の挨拶ぐらいしか理解していない児童に関わったときには大変苦労しました。

この機会を通して、私はたくさんの財産を頂いています。笑顔は児童に伝わり、言葉の壁さえ乗り越えること。さらには実際の教育現場に入ること、毎日必ず何かしら得るものがあり、毎日が場面対応の実践演習になります。そして、さまざまな先生方と一緒に授業に関わらせていただくことで、その先生方の良いところを観察でき、自分の教育観と照らし合わせることで、大学生活や教科書・参考書からでは学べない多くのことを、身をもって体験し、学ぶことができます。

将来教員に必ずなりたい！！という意思をもっていらっしゃる方には、是非ともお勧めしたい、それが学校ボランティアです。おいしい給食も食べられます！



## 子どもとかかわること

2006年度 卒業生 小野塚 俊輔

私は今年の4月から、大口台小学校放課後キッズクラブ「ばれっと」で指導員として働いています。小学校の授業が終わると100人近い子どもたちが「ばれっと」にやってきて、5時の帰宅時間になるまで野球やドッジボール、鬼ごっこやお絵かきなど、思い思いに遊んで過ごします。また、その内40人ほどの子どもたちは5時以降も「ばれっと」に残り、掃除をしておやつを食べ、コース毎にまとまって帰ったり、保護者のお迎えを待ったりしています。

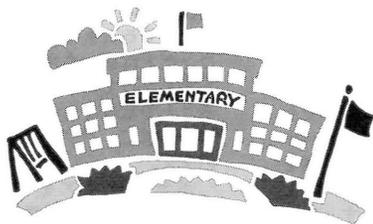
私は、子ども同士が互いを思いやり、学びあう中で楽しい時間を過ごせたらいいなあという思いで毎日子どもたちとかかわっています。

ある日、こんなことがありました。サッカーが得意のA君と、A君ほど上手ではないけれどサッカーが好きなB君がPK合戦をやることに。やはり力の差があつてすぐにB君の勝利は難しい状況になりました。するとB君はとても悔しそうに「負けるが勝ちだもんね！」と走って行ってしまいました。するとすかさずA君は「待って！B君はこれから蹴っていいから！」とゴールの間近にボールを置きます。そして見事B君はゴール！さらにA君は「おれはこっからでいいよ！」と自分が蹴る位置も初めよりずっと後ろにします。一方的だった試合は白熱の大接戦

になりました。A君だって本当はとも負けず嫌いです。でも、自分が勝つことよりも友達を思いやり、一緒に楽しく遊ぶ工夫ができたA君は本当にすごい。

また、ある日の掃除の時間のこと。指導員の私が何度注意しても、すごい集中力で本読みをする2年生のC君とD君。そんな時、グループのリーダー的存在の4年生E君が「本片付けて！掃除の時間だろ！」と助け舟を出してくれました。ハツとしてすぐに本棚に本を戻すC君。ところが、よほどおもしろい本なのかD君はまだ本読み続行中。それを見て、今度はE君でなく、同じ2年生のC君が「今E君に言われたでしょ！？掃除だよ！」と注意して、D君も渋々ながらも本読みをやめて掃除を始めることができました。最近ではD君が1年生に同じように声をかける姿を見ることがあります。集団の中での学びあいは、子どもたちを確実に成長させるのだと実感できる出来事でした。

このような、毎日のささいな出来事から学ぶことがたくさんあります。子どもたちのかかわり方での悩みや葛藤は尽きませんが、子どもたち全員が「また明日も来たい！」と思えるようなかかわりができたらいいな、と思っています。



**神奈川大学 教職課程指導室**

電話：045-481-5661（内線4228）

FAX：045-413-4154

E-mail：educ@kanagawa-u.ac.jp

